

風姿花伝第二、物もの学まね条々

直面ひためん

これ又大事なり。凡、元よ
り俗の身なれば、易かりぬ
べき事なれども、不思議に
能の位上がらねば、直面は
見られぬ者也。先づ是は、
仮令けりやう、その物くに依りて
学まなばむ事、是非なし。
面めん

(口訳)

直面も中々大事なものである。一体、直面物は大ていが俗人の身をまねるのであるから、俗人の役者が演ずるのは、極く容易な筈であるが、不思議に、芸の位が上達して居ないと、直面物は見るに堪へないものである。先づ直面物は、大体、その物々によつて、その真似をやつて行くより仕方がないが、その真似方に於て、面色まで似せるなどといふ道理はある筈がないのに、往々演者の常の顔付をかへて、表情を出さうとすることがある。かやうな演出は見るに堪へないものである。それで、

色をば、似すべき道理も無きを、常の貌に変へて、顔氣色を繕う事あり。更に見られぬ物なり。振る舞ひ風

情をば、その物に似すべし。

顔氣色をば、如何にも自なりに、繕はで、直に持

つべし。

〔評〕 直面で問題となるのは、顔面表情を忌む事である。これは今日でも原則となつてゐる。表情を顔面にあらはさないで、それで居て曲の感じを出すといふ所に、演者の芸位の高さが要求せられるものと思ふ。

振舞や風情に於てはその物に十分に似せるべく、顔の様子は、如何にも自分の顔つきのままに、少しも繕ふなどといふことなく、あたりまへにしてゐるべきである。